

## 書 評

しろうず

白水 智 著

『知られざる日本—山村の語る歴史世界—』

日本放送出版協会 2005年5月刊

B 6 版 294頁 1,160円

著者の白水氏は、日本の山村に深い関心をよせる数少ない歴史学者の一人である。氏は若狭国名田庄の研究をきっかけに、1990年頃より山村に眼を向け<sup>1)</sup>、日本史学における山村研究の欠落を問題提起された<sup>2)</sup>。また、中央大学山村研究会の中心的なメンバーとして山梨県早川町の史料調査を進め<sup>3)</sup>、その一方で長野と新潟の両県にまたがる秋山郷へも史料調査に通われている。

本書は、白水氏にとって山村を主題とする最初の御著書であり、他の史家の山村論が少しずつ刊行されるようになってきた現在<sup>4)</sup>、歴史学の山村研究を牽引する仕事の一つとしても、評者もその末席にある地理学の山村研究との比較という意味でも、注目の著作である。ただし、本書は一般読者を対象としたNHKブックスの一つとして用意されたものであり、その分、詳細な分析や学史的な議論は控えられている。しかし逆に、著者の問題意識や山村観は明瞭かつ平易に語られており、内容的に重なる近年の論考と併読すれば<sup>5)</sup>、氏の視座や問題意識はいつそう明快となる。

まずは本書の内容を概観しよう。以下に目次を示したように、構成は大きく二部に分かれている。

序章 山村の現在をふり返る

第1部 山村の実像を探る

第1章 山村の生活文化体系とは何か

第2章 山村は閉ざされているか

第2部 山村はどう語られてきたか

第1章 文献史料は何を語るのか

第2章 内と外からの山村像

終章 新たな山村像を求めて

最初に、序章「山村の現在をふり返る」では、著者の問題意識が述べられる。「山村を『遅れた農村』とのみ見なし、日本列島の大きな領域を占める山間地を、なきがごとくに無視して成り立ってきた日本史像に歪みはないのだろうか」(18頁)という著者の問いかけは、本書の二つの大きな課

題を導いている。一つは、山村の豊かで複合的な生活のあり方に対する歴史学的な検討であり、第1部「山村の実像を探る」の主題となる。いま一つは、歪められた山村像がいかんにして形成されたかという課題であり、第2部「山村はどう語られてきたか」の論点となる。それは端的に言えば、「山村に関するイメージの多くは、平地の人間が平地の価値観や感覚で作上げたものが多い」(45頁)ということであり、歴史学者によって、また同時代人によって、山村がいかん理解され、表現されてきたか、という問題である。

さて第1部では、まず第1章「山村の生活文化体系とは何か」において、中世と近世の山村の豊かで複合的な生活が、名田庄と秋山郷をそれぞれ例として概観されていく。中世名田庄の場合、領主側の貢租の史料から山川の採集活動の一端が窺える一方、材木生産地として名を馳せていた事実が全く別の史料から素描される。近世秋山郷については、著名な鈴木牧之の『秋山記行』を中心に、焼畑や林業、木工生産、狩猟、漁業、鉱山業、採集、出稼ぎという多様な生業のあり方が論じられている。

そして著者は、「山村は常に生活文化において平地の進歩に後から追従する、『後れた』地域」(98頁)であったと見られるべきではなく、「山には、平地にはない山なりの生活文化の体系ともいえるものが存在していた」(99頁)と述べる。白水氏のいう「生活文化」とは、「その土地で生活していくための知識・技能・信仰・心性・慣習などの要素」(101頁)とされ、その総体としての山村の「生活文化体系」は平地や海辺のそれとは大きく相違するものであったと位置づけられている。

続く第2章「山村は閉ざされているか」では、山村をめぐる空間的なネットワークが焦点となり、中世から近世に至る様々な事例が紹介されている。例えば、中世の名田庄が実は京都と小浜を結ぶ街道沿いにあつて、多額の通行料(河手)を得ていたこと、戦国期の甲斐国早川流域において、交易品となる材木、金、鷹に領主が目をつけていたこと、その早川流域では近世中期以降、林

業が興隆する際、江戸の商人や幕府と巧みに交渉や駆け引きを行う「現地コーディネーター」(137頁)ともいうべき人々が活躍していたことが示される。特に林業は、広い範囲にまたがるネットワークを機動させて初めて成り立つ事業であったことを、著者は改めて確認させてくれる。林業技術者の広域的な繋がりを追跡する第四節「他国稼ぎのネットワーク世界」は、著者の古文書調査にかける熱意によって捉えられた人と人の結びつきが示されており、古文書調査の醍醐味を教えてくれる。

その上で著者は、山村をめぐる交流のあり方を、①食料の移出入、②生活資材の移出入、③物資運送の仕事、④出稼ぎ、⑤婚姻、⑥政治的往来、⑦信仰上の往来、⑧養生・娯楽のための往来、に整理している。そして「遅くとも中世以降の山村にとって、外部との交流がその本来的な属性の一部であった」のであり、それらの村々を「『農村』という平板な用語に置き換えて語ってきたこれまでの歴史学は、大きな忘れ物をしてきた」(180頁)と批判する。

本書の後半を構成する第2部では、まず第1章「文献史料は何を語るのか」において、第1部でみた山村の豊かな「生活文化体系」やネットワークを、歴史学はなぜ見過ごしてきたのか、と著者は問いかける。その最も大きな理由は、歴史学が依拠する文献史料それ自体が、平地の支配システムを基盤として「平準化」(188頁)された文書であり、日本中が稲作地帯であるかのように「目眩まし」(188頁)されることにあるという。例えば、近世の大井川上流域では、石高制の形式を整えるためだけに架空の石高や畑面積が創出された。また秋山郷の村方文書と『秋山記行』を比較すれば、「外部との関係性をもたない生業や家内労働、風俗についての情報」(205頁)は村方文書にはほとんど表出ししないことが指摘されている。

さらに第2章「内と外からの山村像」では、山村が単に外部からのみ否定的なイメージで表現されてきたのではなく、山村住民から自らそのようなイメージを発信してきたことが掘り下げられる。『平家物語』にみえる木曾義仲に対する蔑みや、千葉徳爾のいう山中異界観に触れつつ、著者は「山中に非日常的世界を見出したい平地人の心性」(214頁)を、稲作を豊かさの指標とする発想

の裏返しとして批判する。しかし一方、文字も読めない「愚か村」を意図的に演じさえる近世の山村民のあり方にも、著者は目を向けるのである。

一見、自虐的にみえかねないこの種の自己表象は、一つには「貧困と無知を『期待』して訪れる平地人へのサービス精神」(230頁)の表れであり、いま一つには政治的・経済的な利益を得るための「平地型生活文化をあえて基準にしてハンディを強調する」(239頁)戦術として理解できると著者は説く。後者は、「山によって支えられている生活部面については、まったく捨象してしまっている」(235頁)物言いである。しかし著者は、それが山村の人々の本心ではなかったことを、移住と米食化を主眼とする救済計画を「頑迷」にも拒否する秋山人の姿に見だし、「山村の生活文化体系に関わる誇り」(254頁)として評価している。

本書を締めくくるにあたり、著者は終章「新たな山村像を求めて」において、現代社会から山村の歴史をふり返る意味を問いなおす。本書の検討は山村の史的検討であると同時に、「これまで『標準』であり『進歩』の拠点とされてきた平地生活を相対化する試み」(257頁)でもあったからである。近現代の平地を中心とする拡大再生産の経済に対し、山村的な「『単純再生産』社会」(261頁)は一つの哲学的指針になるかもしれない、と著者は言う。すなわち山村の「労働」には「自己の知識と技能で暮らしていくその手応え、それだけの資源を与えてくれる山へ浸り込める楽しみ」(277頁)があり、それは経済的には高く査定されるものではないが、隷属的で苦役ともいえる近代的な労働のあり方とは異なり、労働によって自己が疎外されることがない。「山村の生活文化体系を、自然との関わり方において、あるいは労働生活の一類型として、有効な理念型として発展させ、発信していくべきではないか」(285頁)と提起して、本書は結ばれている。

さて、以上に概観したように、本書の意図は、中世～近世日本の山村生活の実態を単に復原ないし描写する所にあるわけではない。研究対象としての山村を歴史学のなかで概念化するとともに(第1部)、山村をめぐる表象と認識のあり方を、方法論的な問題と絡ませつつ論じようとする所に

(第2部)、大きな特色がある。以下ではそのような学史的・方法論的な論点を中心に、本書の意義を整理しておきたいと思う。

第1部で指摘された山村の二つの特質、生業の多様なないし複合性、および広域的な流通ないしネットワークとの繋がりは、地理学や民俗学においては伝統的な山村の特質として、繰り返し議論されてきたものである。しかし歴史学においては、断片的な示唆はあったものの、本書のようにその点を明確に山村の特質として位置づける理解は、従来ほとんど無かった。そのような状況のなかであって著者は、「山村」の定義については「単純に『山の中にある集落』ととらえておきたい」(38頁)としつつも、「生活文化体系」の視点を提起することを通じて、地理学や民俗学の理解と軌を一にする山村の特質を、中世ないし近世において見いだしている。これまでの日本史学において、著者ほど積極的に山村を研究対象として規定し、併せて方法論的枠組みを提示した例を、評者は他に知らない。

加えて著者のいう「生活文化体系」は、生業のみにとどまるものでなく、信仰・心性・慣習にまで及ぶものとされ、その点では生業と流通に焦点を絞りがちな地理学よりも民俗学により近いといえるかもしれない。しかし、例えば山の神信仰や共有林野についてのまとまった言及は本書には含まれておらず、第1部の記述は「生活文化体系」のうちでも生業と労働に関する要素に集中しているようにみえる。著者の提起した「体系」の全体がどのような構造を形作るものなのか、もう少し多面的かつ具体的な検討に頁が割かれていたならば、いっそう理解しやすいものとなっていたと思われる。

しかしそのような無い物ねだりの壁となるのが、「残念ながら中世に関しては、断片的な史料は多くあるものの、まだまだ鮮やかに山の生活の実態を描ききる材料に乏しい」(67頁)という史料制約である。この点は本書に、もう一つの制約をもたらしている。それは、本書の内容が主に中世と近世を中心としていながらも、「いまだ通時代的な山村の歴史を理解するには至っていない」(280頁)と著者も吐露するように、歴史学にとって本来重要な論点になるべき各時代の位置づけや時期的な変化に関して、必ずしも踏み込んだ

見解が示されていないことである。

むしろ著者は名田庄や秋山郷といった事例を一般化することに慎重であり、「山村と一口にいても、地域により、時代により、生業・生活もさまざまな形をとってきた」(96頁)と釘を刺している。これは、文化地理学において必ずしも内実を伴わないまま山村史の時代区分が議論されてきたこととは対照的に<sup>6)</sup>、著者の堅実な姿勢を表すものである。しかし結果としては、著者が論じる山村の姿は、大まかに前近代というほかない広い時期から集約されたものになっているように見える。「山村への注目の必要を説き、ある種のアンチテーゼを提起したのみで終わってしまった」(292頁)と、著者自らあとがきで振り返るように、過去の山村を研究対象として定立し、まずはそれを認知させる所から始めなければならないという歴史学の学問状況が、第1部に色濃く反映されていると言うべきかも知れない。

一方、第2部は、史料制約を方法論的に捉え返そうとする作業にほかならない。文献史料には特定の視点から大きな歪みが与えられていること、それが現代の研究者をいとも簡単に曇らせてしまうことを指摘する第1章は、山村をめぐる史料批判の手引きであるとともに、惰性的な実証主義が見落としてきた「歴史学のエアポケット」に対する痛烈な批判となっている。しかし著者は、この問題を単なる史料分析上の注意事項として扱っているのではない。それが山村をめぐる新たな課題、すなわち「山村像」ないし「山村観」の問題、あるいは評者なりに言い換えれば村落をめぐる表象の問題<sup>7)</sup>として位置づけられねばならないことを、第2章で平易に解きほぐしている。

とりわけ史料調査を続行されている近世秋山郷に関して、著者の分析は多面的であり、二重に入り組んだ表象の絡み合いが見いだされている。すなわち、『秋山記行』の作者が抱いていた山村を「愚か村」と見る先入観や、「山地型」の生活に否定的な外部の村役人の視線、そして村方文書に表れた住人のリテラシーといった複数の視線を対照させることによって、外部からの「山村像」と外部者向けに住人が用意した「山村像」とが相互に影響しあっていたこと、しかしその背後で秋山の人々は山の「生活文化」への自律性を保持していたことが、指摘されているのである。

このような著者の第2部の作業は、山村独自の特質に焦点を絞った第1部とは対照的に、水田中心あるいは「平地的」な価値観との緊張関係のなかに、日本の山村がながらく置かれてきたことを如実に示している。近世の秋山郷の住人が訪問者の期待する「山村像」を演じたように、あるいは近代の秋山郷で急速に水田開発が進んだように<sup>8)</sup>、「平地的」な価値観は山村の人々の意識や「生活文化」にも強い影響を現実にも与えてきた。だとすれば、研究者の視座のなかで、そして史料分析のなかで、水田中心史観あるいは「平地的」な価値観を単に相対化ないし脱構築したことをもって、満足してはならないだろう。そういった価値観がいかにして政治的・法制度的に編成され、そして山村生活の内実にもどの程度影響力を及ぼし、あるいは及ぼすことができなかつたかが、同時に問われなければならない<sup>9)</sup>。それは山村の歴史学だけでなく、歴史地理学の課題でもあろう。

著者は、「歴史学的手法でかつての山村像を描くことは非常に困難といえよう」(278頁)と一方では嘆息しているが、一方では古文書の裏側を読みとる「嗅覚」(207頁)を喚起している。そして次なる課題として、「山村の生活や生業の内実、あるいは山村をめぐる政治や法制度について具体的な事実を明らかにする作業」(292頁)を挙げる。山村に関わる歴史学の成果は自治体史も含めて決して少なくないのであるが、著者が批判するようにその多くは「遅れた農村」として山村を位置づけてしまうために、見落とされてきた事実や、一面的に解釈されてきた史料が多々残されているように思われる<sup>10)</sup>。その意味では、山村をめぐる具体的な事実を再発見する作業は、まだまだ手つかずのまま残されているのである。本書をきっかけとして、歴史学や地理学を含めて、学際的な山村研究が着実に展開することを期待したい。

(米家泰作)

〔注〕

- 1) 白水 智「ある山間荘園の生業と外部交流—若狭国名田荘の場合—」, 民衆史研究39, 1990, 57-77頁。
- 2) 白水 智「文献史学と山村研究」, 日本史学集録19, 1996, 1-18頁。
- 3) その成果は毎年『山村研究会報告集』としてまとめられてきたが、さらに文書目録としても整理されている。中央大学山村研究会編, 『山村史料の調査と成果—山梨県南巨摩郡早川町葉坪・樽坪・千須和—』, 中央大学山村研究会, 2003。
- 4) 笹本正治『山に生きる—山村史の多様性を求めて—』, 岩田書院, 2001。大賀郁夫『近世山村社会構造の研究』, 校倉書房, 2005。
- 5) 白水 智「近世山間地域における環境利用と村落—信濃国秋山の生活世界から—」, 国立歴史民俗博物館研究報告123, 2005, 423-449頁。同「山村と歴史学—生活文化体系という視座から—」, 民衆史研究69, 2005, 21-38頁。
- 6) 米家泰作『『山村』概念の歴史性—その視点と表象をめぐって—』, 民衆史研究69, 2005, 3-20頁。
- 7) 前掲6)。米家泰作「村落の歴史地理」, 人文地理56-3, 2004, 290-295頁。
- 8) 市川健夫『平家の谷—秘境秋山郷—』, 令文社, 1961, 49-54頁。
- 9) 例えば, 原田信男『歴史のなかの米と肉—食物と天皇・差別—』, 平凡社, 1993, および同『木の実とハンバーガー—日本食生活史の試み—』, 日本放送出版協会, 1995, が示唆的である。
- 10) 例えば, 白水 智「山の世界と山野相論—名手・粉河相論を手がかりに—」(峰岸純夫編『日本中世史の再発見』, 吉川弘文館, 2003) 145-164頁, が示唆的である。